

Title	「クロアチア独立国家」におけるセルビア人抹殺政策
Sub Title	The persecution of the Serbian population in the "Independent state of Croatia"
Author	清水, 明子(Shimuzu, Akiko)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2002
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.94, No.4 (2002. 1) ,p.627(63)- 644(80)
JaLC DOI	10.14991/001.20020101-0063
Abstract	
Notes	小特集：マス・キリングの社会史
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20020101-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「クロアチア独立国家」におけるセルビア人抹殺政策

清水 明子

I. はじめに

アウシュヴィッツを知らない者はいないが、ヤセノヴァツを知る者は少ない。「ヤセノヴァツ」とは、第2次世界大戦中の「クロアチア独立国家」に存在した強制収容所システムの名称である。戦後、クロアチア独立国家における最大の強制収容所であったヤセノヴァツの犠牲者は、60万人から70万人とされた。⁽¹⁾「占領軍とその協力者による犯罪を確定するためのクロアチア共和国委員会」は、ヤセノヴァツにおける犠牲者に関し50万から60万という数字をあげている。⁽²⁾しかし、チトー・ユーゴ大統領が死去するまでの戦後35年間、ユーゴ国内で「ヤセノヴァツ」について議論することは事実上禁じられ、収容所の跡地は意図的に消し去られた。この事実が、クロアチア共和国による「ヤセノヴァツ」否定に道を開き、現在もユーゴ国外における「大量殺戮」や「ジェノサイド」に関する議論にこのテーマが登場することが殆どない事態を招来した。⁽³⁾

クロアチア独立国家が、国家最大の敵と規定し、迫害の主要な対象となったセルビア系住民は、人種的にも言語的にもクロアチア人と全く異なるところがない。セルビア人の使用文字はキリル文字とされるが、セルビア人の出版物の半分以上がラテン文字を使用していることを考えれば、この点にも決定的な違いはない。唯一の相違点は、セルビア人がセルビア正教徒で、クロアチア人がカトリック教徒であるという点だけである。

ヤセノヴァツにおけるような次元の大きい大量殺戮は、個人的な報復行為のみでは不可能であり、当時のクロアチアが国家政策によりセルビア人迫害を推進することで初めて可能となった。本論で

(1) Holm Sundhaussen, *Experiment Jugoslawien*, Mannheim 1993, 75.

(2) *Zlocini u logoru Jasenovac*, Zemaljska Komisija Hrvatske za utvrđivanje zlocina okupatora i njihovih pomagaca, Zagreb 1946, 38.

(3) 犠牲者の数に関する80年代以降の論争は別稿で扱う。しかし、このテーマを数の問題に還元することはできない。

は、前半部分でクロアチア独立国家の反セルビア人政策の枠組とその計画性に焦点を当て、後半部分で、戦後ユーゴスラヴィアで出版され、一冊を除き外国で翻訳されることのなかった回想録等の文献を用い、クロアチアの収容所システムの見取り図を得たい。その際、対象とする時期を、戦闘や報復行為とは無関係にいわゆる「民族浄化」が計画的に行われた42年までとする。ユダヤ人とロマ人もセルビア人と同様の運命を辿ったことをここに付け加えておく。

II. クロアチア独立国家の成立

1. クロアチア独立国家樹立とその領土的範囲

41年4月10日、「クロアチア独立国家」の樹立が宣言され、その領土はユーゴスラヴィア王国から分離独立した⁽⁴⁾。しかし、独立とは名ばかりで、第2次世界大戦中のクロアチアは、独伊の占領下に置かれ、国際法上の主体になることはなかった⁽⁵⁾。独ソ戦を控え、ドイツの兵力をバルカンに割きたくなかったドイツは、ユーゴに対し領土的野心を抱く枢軸国、もしくは、内部からユーゴを崩す意図のあった国内の分離主義勢力に占領と統治を委ねた結果であった⁽⁶⁾。

本来ヒトラーは、4月12日の「ユーゴ解体の暫定方針」において、クロアチア独立国家の領土に、ボスニアを含まない小クロアチア主義的解決を提案していた。その後、クロアチア領の詳細決定を一任されたムソリーニが、アドリア海沿岸地域の自国への併合と引換に、クロアチアによるボスニア併合を特別に許可したことで、クロアチアは、全人口約650万の半分弱がクロアチア人であるの⁽⁷⁾に対し、約3分の1にあたるセルビア系住民をその領土に抱えることになった。

2. クロアチア独立国家の担い手

クロアチアでは、「ウスタシャ」(意味は「蜂起する者」)といわれる「ファシスト集団」が政権をついた。創設者の弁護士アンテ・パヴェリッチは、クロアチアの独立を掲げるクロアチア権利党の指導者であったが、国内では広い支持を得られず、29年の国王独裁樹立を機にイタリアに亡命した。そこで、テロ組織のウスタシャ運動を発足(正式な設立は32年)させ、ムソリーニの支援を受けながら、手段を選ばずクロアチアの独立を追及した。34年にはアレクサンダル・ユーゴ国王とバルト⁽⁸⁾ウ仏外相の暗殺に荷担し、国際的に有名なテロ組織となった。同年、ウスタシャの訓練キャンプ

(4) Holm Sundhaussen, *Geschichte Jugoslawiens 1918-1980*, Stuttgart, Berlin 1982, 114.

(5) 日本は他の枢軸国とともにクロアチア独立国家を承認した。

(6) Sundhaussen, *Experiment*, 70. ユーゴの「分割統治」に参加した国は、イタリア、アルバニア、クロアチア、ブルガリア、ハンガリーであるが、各支配地域で無限の暴力を解き放つこととなり、結果として、ドイツの戦略的意図は裏目に出ている。

(7) Sundhaussen, *Geschichte*, 115, 121.

(イタリアのリバリ)では、ウスタシャがセルビア系住民の騒擾を惹起するまで挑発を続け、騒擾を理由にセルビア系住民を粛清する、というセルビア人抹殺計画が練られ、大量殺戮を可能にする強制収容所の設置が計画されたという。⁽⁹⁾

ウスタシャは、イタリアのファシズムとナチスの国家社会主義を模倣するべく努めるが、36年当時、ドイツはウスタシャを未だ政治的交渉相手とはせず、イタリアとハンガリーから支援を受けるに留まった。⁽¹⁰⁾その後、41年4月、ドイツに対し無条件で協力する用意のあったウスタシャが、ドイツの後押しで突如政治の表舞台に踊り出ると同時に、パヴェリッチを、ムソリーニの称号「ドゥッチェ(指導者)」に相応する「ポグラヴニク」とする傀儡政権がクロアチアに誕生した。⁽¹¹⁾

しかし、権力掌握当時、ウスタシャには数百人の党員しかおらず、ザグレブ入城時も国内の支持者は少なかった。クロアチア独立国家を支配するには支持基盤が小さすぎたが、そのウスタシャを支えたのが、全国に組織を持つカトリック教会であった。カトリックの聖職者はウスタシャの主要幹部要員を提供したのみならず、その様々な下部組織を通じて、ウスタシャに新しい党員を獲得した。⁽¹²⁾

脆弱なウスタシャ政権にとり更なる打撃は、クロアチアの対イタリア国境が決定された5月18日のローマ議定書調印が、国内で「屈辱的な出来事」として受容されたことである。ウスタシャ政権の評判は急落し、ザグレブ駐在のホルステナウ独全権將軍によれば、全国でデモとクーデターの試みが見られ、至る所でドイツの保護領化を望む国民の声が聞かれた。⁽¹³⁾

しかも、ウスタシャの政権内部における指導者間の対立は激しく、一致していた点は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナを含む大クロアチアを「敵」を排除しながら実現するという点だけであった。⁽¹⁴⁾その結果、「大クロアチア」は枢軸国にとっては貧弱な同盟国にすぎなかった。というのもウスタシャは暗殺に明け暮れて、戦闘は行わなかったからである。⁽¹⁵⁾という事態にことは帰結した。

(8) 柴宣弘「ユーゴスラヴィア現代史」岩波新書、1996年、71-72頁。Ladislaus Hory, Martin Broszat, *Der Kroatische Ustascha-Staat 1941-1945*, Stuttgart 1964, 19. 32年の規約には、「あらゆる手段を用い」、「クロアチア国家においてクロアチア民族のみが常に支配する」体制を築くことが最大の目標として明記されている。

(9) 48年6月9日、国家保安局における Ljuba Milos の回答。Antun Miletic, *Koncentracioni logor Jasenovac 1941-1945. Dokumenti II*, Beograd 1985, 1012. ミロシュは後にウスタシャ監理局の幹部となった元ヤセノヴァツ収容所司令官。

(10) Sundhaussen, *Experiment*, 71.

(11) Hory/Broszat, 13.

(12) Sundhaussen, *Geschichte*, 119.

(13) Ibid., 117-118.

(14) Sundhaussen, *Experiment*, ibid.

(15) ジョルジュ・カステラン「バルカン世界。火薬庫か平和地帯か」荻原直訳、彩流社、2000年、155頁。

3. 国家政策としての「セルビア人問題解決」

41年4月11日に発表されたウスタシャ政権の基本方針は、クロアチアのセルビア系住民をクロアチア人の「数世紀にわたる敵」と見なし、「セルビア人問題解決」をクロアチア独立国家の生死に関わる「正義のクロアチア民族」の最重要課題とした。⁽¹⁶⁾ 閣僚メンバーは、(1)セルビア人が、クロアチア民族の存続と解放の足枷となる悪の根源である、(2)クロアチアにセルビア人の住む場所はない、という内容を柱とする反セルビア宣伝を各地の政治集会で展開した。

プク法務大臣は、グリナにおける集会で「クロアチア民族のいかなる解放闘争に対しても敵対的であった」、⁽¹⁷⁾「今こそ、その時（セルビア人がセルビアに戻る時）が来た」と演説の中で述べ、ロルコヴィッチ外務大臣は、ドニィ・ミホリャツにおける演説で、「クロアチア民族に不運をもたらし、クロアチア民族にとり異質・異端で、クロアチア民族の中で健全な力を萎えさせ、クロアチア民族を数十年数百年にわたり次から次へと悪に落とした要素全てからクロアチア民族を浄化しなければならない。それは、我が領土に住むセルビア人とユダヤ人である」と、セルビア人をクロアチアの市民として認めない発言を行った。⁽¹⁸⁾

純粋なクロアチア国家を建設するためには、手段を選ぶべきではないと強調したジャンニッチ・ウスタシャ公安問題担当特別代表は、ノヴァ・グラディシュカにおいて、「この国はクロアチア人の国であるべきで、他の何人のものであってもならない。この国を真にクロアチア人の国にし、セルビア人から浄化するために、ウスタシャである我々が使わない手段はない。セルビア人は、数百年にわたり我々を危険に落とし入れたし、今後も機会があればすぐに我々を脅かすであろう」と、セルビア人を除去する必要性を強調した。⁽¹⁹⁾

また、セルビア人殺害の勧めには、現代の十字軍的な意味合いが付与され、クロアチア人の屈折した立場が表現された。6月13日カルロヴァツの演説の中でプク法務大臣は、「東方世界と西方世界との境はドリナ川である。……教会とカトリック信仰に対する忠誠こそ、我々の行動の規範である。歴史は、我々がカトリック教徒でなかったら、とうの昔に消滅していたであろうことを教えている。」⁽²⁰⁾ パヴェリッチ親衛隊の首領でカトリック司祭のイヴォ・グベリナは、「東方でカトリック信仰の前哨に立つ」ことを神の摂理が定めた任務とし、「運命を定める闘争における傍観は、創造主に対する罪」と、直接行動への勧めを行っている。⁽²¹⁾ 西洋文明と野蛮とされるバルカンの狭間にある

(16) Fikreta Jelic-Butic, *Ustase i Nezavisna Drzava Hrvatska 1941/1945*, Zagreb 1978, 163.

(17) 「クロアチア民族」紙41年6月3日掲載。Jelic-Butic, 164から引用。

(18) 「クロアチア民族」紙41年6月28日掲載。Ibid., 164から引用。

(19) Jelic-Butic, 164, 註96.

(20) Vladimir Dedijer, *Jasenovac-das jugoslawische Auschwitz und der Vatikan*, 4. Erweiterte Auflage, Freiburg, 1993, 76-77.

(21) Ibid., 80.

クロアチア人のカトリック的使命と「クロアチア人のカトリック国家復活」を強調することは、西洋への帰属を望む願望の裏返しでもあった。それは、ヒトラーに対して「クロアチア人がスラヴ民族ではなく、究極的には血縁的にも、種族的にも、ゲルマン民族に属することを証明したい」という4月13日のパヴェリッチの発言に表現された。⁽²²⁾

パヴェリッチの代理を務めたミーレ・ブダク文化教育大臣は、41年6月6日、正教徒を放置すれば、その流布範囲が西に拡大してカトリックに害をもたらすことを強調した。41年7月22日、ゴスピッチにおける演説で語った「我々はセルビア人の3分の1を殺害し、3分の1を国外追放し、その残りをカトリック信仰に改宗させてクロアチア人にする。そうすれば、新しいクロアチアから完全にセルビア人を排除でき、10年以内に百パーセントのカトリック化が可能である」という定式は、クロアチア国家の政策目標となった。そして、国家樹立直後から進行中であった民衆レベルにおけるセルビア人迫害を正当化した。⁽²³⁾

4. 大量虐殺を正当化した法律

41年4月17日、パヴェリッチが布告した「国民と国家の保護」法令は、「クロアチア民族の名誉と生活利害を脅かす者、もしくは脅かした者、またどのような方法であれ、クロアチア独立国家の存続及び国家の権威を脅かす者は、その行為が試みの段階にあっても、大逆罪を課せられ、……死刑に処せられる」と規定した。⁽²⁴⁾

セルビア人に関しては、その存在自体が国家を脅かすと国家レベルで宣伝されていたため、セルビア人であることそのものが、大逆罪であると解釈することは難しくなかった。ウスタシャに荷担したカトリック聖職者が説いた反セルビア人宣伝も、敵性民族セルビア人のイメージを助長するのに重要な役割を果たし、この法律のセルビア人への適用を容易にした。その功績によりウスタシャ・ドボイ地区長官に任命され、地区の実権を握ったカムベル司祭は、「クロアチア人とクロアチア人にとり、セルビア人問題以上に大きな問題はない。セルビア人は過去数百年間、我が歴史的民族的領土に大量に侵入した。……（他の人種の特徴とあいまって）その内面に不穏を培い、……ボスニア

(22) Sundhaussen, *Geschichte*, 114.

(23) Dedijer, *ibid.*, 82/3; 43年8月、独外務省南東ヨーロッパ担当特別代表に任命されたヘルマン・ノイバッハーは、回想録の中でクロアチア独立国家の対セルビア人政策について次のように述べている。パヴェリッチの対セルビア人政策、「[3分の1はカトリックに改宗、3分の1は追放、3分の1は殺害!」、その最後の点は遂行された。しかし、ウスタシャ指導者が100万人のセルビア人正教徒（乳児、子供、女性、老人）を殺害したと主張していたのは、私の考えでは、独り善がりの誇張である。手元に届いた報告書をもとにすると、無防備で虐殺された者の数は75万人と推察される。Hermann Neubacher, *Sonderauftrag Sudost 1940-1945. Bericht eines fliegenden Diplomaten*, Goettingen 1956, 31.

(24) Narodne Novine, Nr. 4, in: *Dokumenti. Ustasa*, Zagreb 1995, 149.

をクロアチアおよびスラヴォニアから、リカ地方からダルマチアを、スラヴォニアからクロアチアを分断した」と非難、クロアチア人に嫌悪と一定の戦慄を呼び起こすセルビア人の性質として「うそつき、こびへつらい、だまし、脅迫、自画自賛、犯罪、不公平、排他性」⁽²⁵⁾を挙げている。この法律は聖職者や政治家の発言とあいまって、武装ウスタシャやクロアチアの一般市民によるセルビア人の殺害を正当化する機能を果たした。

更に、通常の刑事・行政裁判所ではなく、党の武装組織「武装ウスタシャ」の管轄下に置かれた移動式・駐留式の即決裁判所が設置されて、テロ行為を法的枠組の中で行うことが可能になった。⁽²⁶⁾

そもそも、セルビア人は「公民」として認められていなかった。41年4月30日に公布された「公民」規定は、「公民」が「アーリア系」で、しかも「クロアチア民族の自由に向けた努力に対し、敵対行為を行わなかった事実を態度によって証明し、クロアチア国民とクロアチア独立国家に忠実に仕える準備と意志のある」者のみであるとした。⁽²⁷⁾セルビア人は、その大部分が以前はクロアチア人で、カトリックから改宗した正教徒にすぎないと見なされたことから、人種的には「アーリア系」と判断されたが、クロアチア民族の解放を常に妨げてきた存在として法的保護の外に置かれた。

5. 大量虐殺を指導した国家機関

41年5月4日付の法令で「秩序安寧局」の設置が決定され、「ウスタシャの闘争とクロアチア民族による蜂起がもたらした成果を維持し、クロアチア国家を防衛する」目的で、SSに倣った武装ウスタシャと警察機構の構築に着手した。⁽²⁸⁾当初この機関が、政敵を取り締まるべき収容所群をその管轄下に置いたが、41年8月26日以降は、警察機能と情報工作をより強化するために「秩序安寧局」を拡大強化した「ウスタシャ監理局（UNS）」が創設されて、全収容所システムをその支配下においた。監理局の任務は「クロアチア独立国家の自由と独立、クロアチア民族の秩序と安全、またウスタシャ解放運動の成果を危険に曝しうるいかなる活動も阻止すること」にあった。ドイツの帝国保安局と同様、秘密情報局と国家保安警察の機能を備えたウスタシャの「党」組織で、ボグラ

(25) Dragutin Kamber, *Slom NDH*, Zagreb 1945, 第2版 1995, 21-22. 92年に独立した新生クロアチア国家は、95年、セルビア人の民族浄化を遂行する直前に、この小冊子の第2版をクロアチア情報センターから出版した。

(26) Narodne Novine, Nr. 32, Nr. 60, Nr. 68, in: *Dokumenti*, 182, 206, 207.

(27) Narodne Novine, Nr. 16. in: *Dokumenti*, 160. セルビア人の他、ユダヤ人及びロマ人も公民になれなかった。ユダヤ人概念・ロマ人概念ともに、ナチス・ドイツの概念よりも拡大解釈されている。参照 Raul Hilberg, *Die Vernichtung der europaeischen Juden*, 2. Bd. 9, Auflage, Frankfurt 1999, 757.

(28) Narodne Novine, 7.5.41. Andjelko Barbic, Prilog proucavanju funkcije Ustaske obrane u osiguravanju koncentracionog logora u Jasenovcu, in: *Okrugli stol "Jasenovac 1986"*, Jasenovac 1986, 161-170, 162. 秩序安寧局の設置を委託されたエウゲン・クヴァテルニクはSSとの関係も緊密で、「クロアチア独立国家樹立後の18か月、政府にあって最も権力のあった人物」とされた。

ヴニクが直接任命する司令官がその頂点に立った。⁽²⁹⁾ウスタシャ監理局は、クロアチア独立国家の領域にあるすべての国家組織の上位に位置付けられ、ボグラヴニクが監理局を通じて直接的に市民の生活を監視することとなった。⁽³⁰⁾

ウスタシャ監理局は、収容所を作る時と場所の決定権をもち、収容所の数にも制限はなかった。同時に、収容所に送る「望ましくない危険な輩」を決定し拘留期間を定める権利も、ウスタシャ監理局が握った。収容所に関する法律が漸く定められたのは、最初の収容所が設置されてから7か月以上も経った41年11月26日のことであった。この時、事実を追認する形で、強制収容所や労働キャンプへの強制収容は、「秩序安寧にとって危険であり、クロアチア民族の平和とクロアチア・ウスタシャ運動の解放闘争の成果を脅かしうる」「望ましくない人間」に対する予防措置として定義された。収容期間は、形式的には最低3か月、最長3年と決められ、地方自治体やウスタシャの各組織が「危険人物」を通報する義務をもった。⁽³¹⁾その通報に基き、または独自の判断で収容所に収容する人物を決め、その他収容所に関して無制限の権限をもっていたのが「ウスタシャ監理局」と42年11月までその下部組織だったウスタシャ警察であった。

しかし、実際は既に41年4月から、大小様々な強制収容所が設置され、収容されたセルビア人、ユダヤ人、反政府活動家、共産主義者などの殺害も公然と行われていたため、これらの措置は進行中のセルビア人迫害に法的枠組を与えたにすぎなかった。

III. 絶滅収容所システム

クロアチア独立国家における大量虐殺には、絶滅収容所における虐殺と、日常生活の場における虐殺とがあった。ここでは、収容所群における虐殺の計画性と規模について考察し、クロアチア独立国家における大量虐殺がジェノサイドの性格を備えていたことを明らかにする。⁽³²⁾

第2次世界大戦中のクロアチアには、16の強制収容所及び8つの収容所が存在した。⁽³³⁾収容所群は41年8月以前のゴスピッチ収容所群と、ヤセノヴァツ収容所システムを形成するヤセノヴァツ収容所群の2グループに大別できる。ヤセノヴァツ収容所群がシステムとして誕生するのは、41年8月

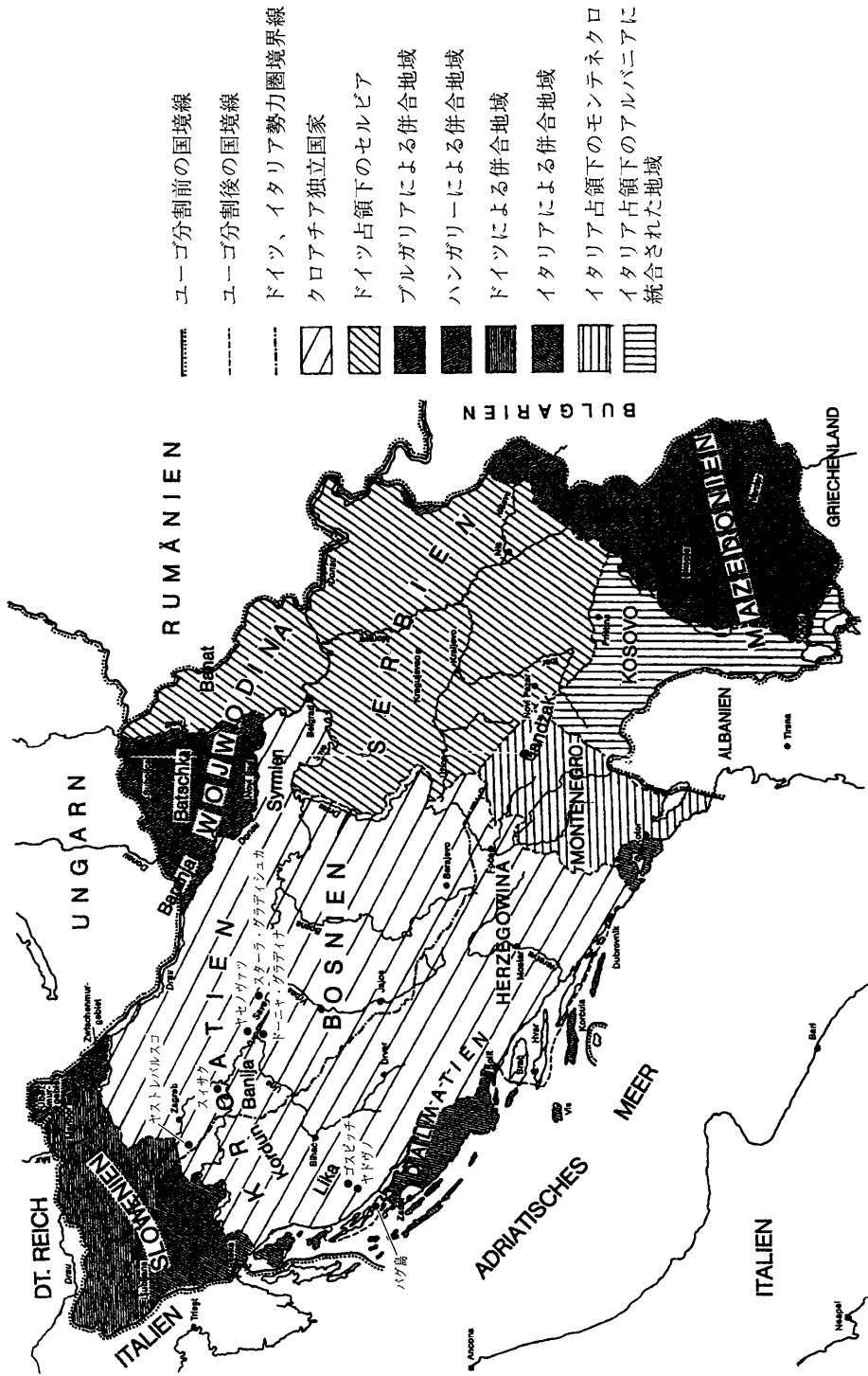
(29) Narodne Novine, Nr. 111, Nr. 183, in: Mladen Colic, *Takozvana NDH. Nezavisna Drzava Hrvatska 1941*, Beograd 1973, 446-447; Hory/Broszat, 86.

(30) Barbic, *ibid.* 本来の国家警察の任務も、監理局の下部組織であったウスタシャ警察が遂行した。ただし、ウスタシャ警察が監理局の管轄下にあるのは42年11月までであり、この時点で、ウスタシャと警察の制度的癒着が、形式的には解消された。

(31) Narodne Novine, Nr. 188, in: Colic, 456-457.

(32) 日常生活の場における虐殺は別稿で扱う。

(33) Jovan Mirkovic, *Objavljeni Izvori i literatura o Jasenovackim logorima*, Banja Luka, Beograd 2000, 9.



出典：Sundhausen, Geschichte Jugoslawiens 1918—1980

16日にイタリア軍が、名目上は既にイタリアの占領下にあった南部クロアチアの一部に軍政を打ち立てると同時に、ウスタシャの運営する絶滅収容所を禁じ、残りの「囚人」がヤセノヴァツに移されて以降のことである。⁽³⁴⁾

1. ゴスピッチ収容所群

1-1. ゴスピッチ収容所 (41年5月～8月)

ゴスピッチ県警がゴスピッチの刑務所を収容所として利用した。41年5月後半に最初の囚人が到着して以来、6・7月にはクロアチア各地から、ユダヤ人やセルビア人の富裕者層、聖職者、都市部のインテリ、農民が送り込まれて囚人到着のピークを迎えた。7月8日、エヴゲン・クヴァテルニク秩序安寧局長は、⁽³⁵⁾「公共の安寧という必要性が、好ましくない人間の隔離を要求すれば、(41年4月10日以降カトリック教徒に改宗した者も含め)すべての正教徒とユダヤ人をゴスピッチに送り、その処理をゴスピッチ県警に任せる必要がある。コプリヴニツアの「ダーニツア」収容所には、⁽³⁶⁾もはや送る必要はない。カトリック教徒とムスリムは、ゴスピッチに送り込まなくともよい」という指令を、各地の県警や都市警察に通達した。ゴスピッチへの収監は、ほぼ確実な死を意味した。ゴスピッチ県警が管轄下に置いていたこの収容所は、ヤドヴノ絶滅収容所とアドリア海のパグ島にある処刑場への入り口の役割を果たしたからである。⁽³⁷⁾

1-2. ヤドヴノ絶滅収容所 (41年5月～8月)

大量虐殺を主要目的としたクロアチア独立国家で最初の絶滅収容所は、41年5月、ゴスピッチ市から南方へ約20キロメートル、ヴェレビット山中の標高1,200メートルのところに設置された。外界から視界を遮断され、木の覆い茂る谷間にあった収容所は、周囲を4メートルの鉄条網で囲まれ、囚人は周辺に複数存在したカルスト地形の洞穴に落とされて殺害された。この絶滅収容所を組織したのは、ゴスピッチ警察長官とゴスピッチの県知事で、収容所の防衛は、リカ地方の武装ウスタシャが担当した。クヴァテルニク秩序安寧局長の上記指令が7月8日に出されると、連日千人前後のセルビア人やユダヤ人が全国各地からゴスピッチ経由でヤドヴノに到着したという。⁽³⁸⁾ヤドヴノで殺

(34) Gert Fricke, *Kroatien 1941-1944. Der "Unabhaengige Staat" in der Sicht des Deutschen Bevollmaechtigten Generals in Agram, Glaise v. Horstenau*, Freiburg 1972, 45; Jelic-Butic, 316の地図を参照。

(35) 秩序安寧局長で、ウスタシャ監理局を組織した。

(36) ダーニツア収容所(41年4月中旬～42年3月)は、ザグレブ北東、ハンガリー国境に近い都市コプリヴニツアの「ダーニツア」化学工場に国家樹立後まもなく設置され、4月末には既に新聞紙上で「数多くのチェトニックと元政治家が逮捕された」と宣伝された。7月15日の囚人名簿で名前が確認された2,656人のうち粛清される予定であった1,960人がゴスピッチ収容所に送られた。参照：Mirko Persen, *Ustaski logori*, Zagreb 1990, 70-71。

(37) Persen, 80-81.

(38) Colic, 382.

害された人は約3万5千人とも、約7万2千人とも言われる。⁽³⁹⁾⁽⁴⁰⁾

1-3. バグ島の絶滅収容所 (41年6月～8月)

41年6月、男性を収容するスラナ収容所と女性・子供を収容するメタイナ収容所(スラナ収容所から西へ3km)がアドリア海のバグ島に設置され、主としてゴスピッチ収容所からセルビア人とユダヤ人の囚人が移送されてきた。スラナは、ヤドヴノと同様、大量虐殺を唯一の目的とした絶滅収容所であり、6月25日に到着した最初の囚人が、バラック作りと鉄条網を張る作業を行った。囚人の殺害場所は、スラナ近郊のフルナジュおよびバグ島と大陸間の運河であったが、重石をつけられて溺死した者の方が、陸地で殺害された者より多かった。8月20日、バグ島の絶滅収容所は閉鎖され、生き残ったユダヤ人450人のうち、女性は他の収容所(クルシュチツァ収容所)に、男性はヤドヴノもしくはヤセノヴァツに送られた。ヤドヴノで殺害されたセルビア人も約3千人に上るといわれる。⁽⁴¹⁾収容所の閉鎖後、伝染病蔓延を恐れたイタリア占領軍がフルナジュに埋葬されていた遺体を焼却処分にした。第5軍司令部衛生保健局・第一殺菌担当部局長が9月22日に記した報告書によると、成人男性407人、女性293人、5歳から15歳までの子供91人、計791人の遺体が発掘され、古いもので約3か月が経過していた。⁽⁴²⁾

2. ヤセノヴァツ収容所群

2-1. ヤセノヴァツ強制収容所 (第1から第6収容所)

「ヤセノヴァツ収容所」は、第一から第六までの6つの収容所から構成された。ここでは、最大の収容所であった第三収容所「レンガ工場」を扱う。第三収容所は、「バチッチ・イ・ドウルック」会社のレンガ工場、鎖工場、製粉所、製材所などを利用して設置された。ヤセノヴァツが選ばれた理由には、インフラが存在した他、その地理的条件と宣伝効果が考えられる。ザグレブとベオグラードを結ぶ鉄道の近くにあり交通の便がよい一方で、三方をサヴァ川、ウナ川、ヴェリキ・ストゥルグ川に囲まれ、外から攻撃を受けにくく、囚人の逃亡も困難であった。また、ヤセノヴァツを囲む湿原には19世紀から灌漑計画が存在したため、ウスタシャ側は、ヤセノヴァツ収容所がその灌漑を行う「労働キャンプ」であり、労働を通じて危険人物の再教育が行われるとのイメージを宣伝することができた。⁽⁴³⁾公共労働省建設局が囚人用のバラック作りを担当し、41年8月23日付の「クロアチア民族」新聞には、労働者の受け入れ準備が整い、湿地帯トレベジュとローニャの灌漑を通じサ

(39) *Enciklopedija Jugoslavije*, Sveska 3, 566.

(40) *Vojna Enciklopedija*, Beograd 1972, 508.

(41) Colic, 382; Persen, 96.

(42) Persen, 100-101.

(43) Ana Pozar, "Jasenovac" trazi vise istrazivanja, p. 12-17, in: *Okrugli stol 21. travnja 1984*, Petrinja 1985, 15.

ヴァ川の整備が行われるとの広報記事が掲載された。⁽⁴⁴⁾

当初、12ヘクタールであったその領域は、43年には125ヘクタールに拡大され、45年4月22日、生き残った囚人87人が逃亡に成功するまで収容所は存続した。⁽⁴⁵⁾当初、囚人の主要な処刑地は、収容所内部と、サヴァ川河畔の荷物積載所「グラニク」であったが、収容所における虐殺が外部に知られるようになると、42年2月初旬、パヴェリッチが収容所における殺害を禁じた。⁽⁴⁶⁾

絶滅収容所における殺害の方法は、自らも囚人で収容所の衛生問題を担当したクロアチア人医師、ニコラ・ニコリッチが、戦後直後に記した回想録の中で、約50通りの方法を挙げている。それによると、使用された手段は、レヴォルバー、カービン銃、機関銃、爆弾、ナイフ、斧、まさかり、木槌、鉄の棒、鉄ハンマー、つるはし、ベルトや革のむちと多岐にわたり、殺害方法も、絞殺、火炙り、火葬、凍死、窒息、餓死など様々であった。⁽⁴⁷⁾火葬は、42年1月初旬、当時のマトコヴィッチ司令官がピチリ技師と共に、レンガ工場の炉を一度に遺体40体を焼却できるよう改造した火葬用炉で行われた。当初囚人は、製陶用の焼き窯という説明を受けたため、「製陶所」と呼んでいたものである。焼き窯の前に囚人を立たせ、生きながら窯に押し込み殺害する試みは、数回の試運転の後囚人の抵抗で頓挫し、その後は殺害された囚人の遺体を焼却処分するためにだけ使われた。42年1月から5月までの5か月間、煙突から絶え間なく上る煙で辺りに特有の悪臭が充満すると、囚人が生きながら火葬されるという噂が国内に広がり、この作業も中止された。それ以降、遺体は主にドーニャ・グラディナに埋葬されることとなる。⁽⁴⁸⁾

2-2. ドーニャ・グラディナの民族浄化と処刑地としての利用

サヴァ川を挟んだヤセノヴァツの対岸にあるドーニャ・グラディナは、クロアチア独立国家における最大の処刑地であった。41年12月から42年1月にかけて、処刑地として使われるようになった。⁽⁴⁹⁾3方をウナ川とサヴァ川に囲まれ、芝生と灌木や木々に覆われた半島のようなグラディナの地形は、南方から接近できる以外は陸の孤島である。南方には、グラディナを取り囲むように塹壕が掘られ、監視塔が複数設置された。⁽⁵⁰⁾ここは、42年初めに設置され、通常の警察や行政の権力が及ば

(44) Antun Miletic, *Koncentracioni logor Jasenovac 1941-1945. Dokumenti, III*, Beograd 1987, 704-705.

(45) 4月21日には、囚人で書記を担当したアンティッチのメモによると、1,073人の囚人が存在した。Bulajic, *Vatikan i Jasenovac. Dokumenti*, Beograd 1987, 670.

(46) Dusan D. Samardzija, *Bosanskodubicko podrucje u NOR-u i socijalitickoj revoluciji 1941-1945*, Bosanska Dubica 1984.

(47) Nikola Nikolic, *Jasenovacki logor smrti*, Sarajevo 1946, 40-57.

(48) Nikolic, 50-53; Dedijer, *Jasenovac, das jugoslawische Ausschwitz*, 155-157.

(49) ドーニャ・グラディナは、「最大のセルビア人地下都市」と呼ばれる。参照：Djordje Lekic, *Jasenovac-najveci srpski grad pod zemljom*, in: *Jasenovac sistem ustaskih logora smrti*, Beograd 1996, 46-49.

ず、SS を模して構築された武装ウスタシャのみが支配権を握った「安全ベルト地帯」の一部であった。⁽⁵¹⁾

「安全ベルト地帯」に組み込まれる以前は、グラディナやドラクセニチ村にもセルビア系住民が住んでいた。「ヤセノヴァツは、常にサヴァ川の向うから圧迫を受け不穏に曝されていた。グラディナ村からは毎日のようにヤセノヴァツに向けて撃ってきた。そこで、ウスタシャ司令部のルブリッチ司令官と協議して、ヤセノヴァツの南方、サヴァ川とウナ川の間の地域で掃討作戦を実施することとした」と、掃討作戦を率いたスコリベク中佐の報告書（42年1月16日付）にあるように、ヤセノヴァツとグラディナを周囲から隔離しセルビア系住民の粛清を行う環境を整備するために、ウスタシャ指導部と国土防衛省が、ヤセノヴァツ周辺に駐留する国土防衛軍と武装ウスタシャ計1,200人にグラディナ村とドラクセニチ村を占領し、セルビア系住民を「浄化する」決定を行った。

この掃討作戦で、セルビア系住民浄化にシンボリックの意味合いをもったのは、ドラクセニチ村における虐殺である。掃討作戦の開始された42年1月14日はセルビア正教の元旦にあたり、ドラクセニチの男性住民は新年の集いに行き留守であった。ウスタシャは司令官が話をするという口実で残った村人に召集をかけ、教会内で鈍器による虐殺を実施した。犠牲となった村人は約200人に上り、武装したセルビア人男性が村に戻ってきた時には、女性2人と2歳の子供1人が生き残っているにすぎなかった。⁽⁵²⁾ 無抵抗な住民の排除が行われた後のグラディナ村とドラクセニチ村は、ヤセノヴァツ収容所システムの領域に取り込まれた。こうして虐殺の実施場所と死体の埋葬地を確保したウスタシャ司令部は、42年4月27日、内務省を通じて全地方機関に「ヤセノヴァツ収容所は囚人を無制限に受け入れることができる」と通達した。⁽⁵³⁾

ドーニャ・グラディナに、何人の犠牲者が埋葬されているかについての確実な答えは出ていない。⁽⁵⁴⁾ 61年、ドーニャ・グラディナが属する自治体であるボサンスカ・ドゥーブイツァ地区の人民解放戦争戦士協会連盟支部は、61年11月、考古学者、法医学者、人類学者にグラディナの発掘調査を依頼し、約十分の一を発掘したところ、木槌などの鈍器で破壊された頭蓋骨を約5万8千個発掘したこ

(50) Dusan Misiraca, *Koncentracioni logor Jasenovac 1941-1945, Nase starine, XII*, Sarajevo 1969, 122.

(51) Barbic, 164.

(52) Samardzija, *ibid.*, 154-156. 共産主義者は、セルビア正教の新年を意図的に無視する形で、記念碑に1月14日のかわりに15日と刻んだ。ドラクセニチ村には、現在でも、鈍器で殺害された犠牲者の脳から出た脳みそや血痕を集めて弔った「脳の墓」が存在する。ドラクセニチからは、掃討作戦の初日のみでも150頭の牛、40頭の豚、4頭の羊が没収され、収容所の運営に役立てられた。

(53) Milan Bulajic, *Jasenovac-System of Croatian Ustasha Camps of Genocide*, Beograd 2000 (Ms), 1-23, 1.

(54) ドーニャ・グラディナの所属するドゥーブイツァ地区には、1960年代まで徴兵にいく年齢の男子がいなかった。

とから、120か所の大量埋葬墓地に約550,800人の犠牲者が埋葬されていると推測した。⁽⁵⁵⁾ 61年から64年にかけて、ドーニャ・グラディナで4回にわたり発掘調査を行なった調査団は、表面積15㎡で深さ40cmの埋葬墓地を発掘したところ197人の遺体が発掘され、そのうち14歳までの子供は51人で総数の4分の1以上にあたること、1㎡あたりの平均埋葬人数が33人に上ること、遺体のまとう洋服から、セルビア人農民が主要な犠牲者であるという調査結果を出した。また、鈍器で割られた頭蓋骨や、鎌の形をした「セルビア人カッター」と呼ばれる特殊ナイフと、それを使用して喉を掻き切る際に傷つけた頸椎の骨も多数見つかり、ウスタシャによる殺害方法を裏付ける物的証拠として収集された。この調査団は、発掘作業を行ったドーニャ・グラディナの大量埋葬墓地2立方メートルにつき埋葬されている遺体は平均27体で、遺体の総数は約73万人に及ぶという中間発表を準備した。しかし、当時のチトー政権が調査結果の公表を禁じたため、公表されたのは92年になってからであった。⁽⁵⁶⁾ その後、本格的な発掘調査は行われておらず、現在でもサヴァ川の水位が下がると新しい埋葬墓地が発見されていること、サヴァ川に遺棄されたり、焼き窯で焼却された死体も数千体に上るとされることから、殺害された者の正確な数を把握することは不可能とされる。⁽⁵⁷⁾

ウスタシャが、ドーニャ・グラディナで殺害した囚人から奪い取り、ザグレブの旧市街カピトルにあるフランシスコ会修道院に持ち込まれとされる貴金属は、戦後の46年1月、聴聞席の下から発見された。36箱の木箱には、様々なイニシャルのついた金の腕時計や指輪、正教徒から奪った金のアイコンと首飾り、ダヴィドの星がついたネックレス、農民が装飾として使ったダカット貨幣が収納されていた。それぞれの箱に、ウスタシャの諸大臣や幹部の署名した書類も添えられていた。⁽⁵⁸⁾

また、ドーニャ・グラディナには死体から服を集めることを任務とした衣服収集係もいた。ユダヤ人のアドルフ・シュヴァルツェンベルクは、数人で処刑後のグラディナに赴き、使えそうな服装をヤセノヴァツの倉庫にもって行き、血に染まったものや破れたものは梱包して、再利用のため貨物輸送で「衣服工場」に送った。42年6月から43年11月まで「衣服」部に所属している間、100ワゴン以上の衣服が鉄道で「衣服工場」に送られたと証言している。⁽⁵⁹⁾

(55) Dedijer, *Vatikan i Jasenovac*, 662.

(56) 調査団を率いたのは、ヴィグ・プロダル・スロヴェニア・リュブリャナ大学人類学研究所研究員と同研究所研究助手、および、当時ユーゴ・ノヴィサド大学法医学研究所研究員で99年当時、英国王立人類学研究所研究員を務めていたスルボリュプ・ジヴァノヴィッチで、調査は埋葬墓地の遺体の数、大きさ、死亡原因、性別などを明らかにすることを目的とした。Srboljub Zivanovic, *Svedocenje u logoru Jasenovac*, London 1999 (Ms), 1-11, 7-8; *Izvestaj antropologa o nalazima pri Iskopavanju grobnica na gradini kod Jasenovaca*, 1964 (Ms), 1-32, 20; “Naucnim metodama do prave istine”, in: *Glas Srpski*, 10.5.2000.

(57) Dedijer, *das jugoslawische Auschwitz*, 21.

(58) Bulajic, *Jasenovac. “Balkan Auschwitz”*, Belgrade 2001, 115-116.

(59) Ibid., 113-115.

2-3. サヴァ川沿セルビア人居住区の民族浄化

ヤセノヴァツ収容所群の近郊では、武装ウスタシャの排他的支配が確立した「安全ベルト地帯」を拡張すると同時に、強制収容所を経済的に支える農場や手工業ファームを確保するため、セルビア系住民の浄化が実行された。ヤセノヴァツからスターラ・グラディシュカまでのサヴァ川沿いは、二村を除きセルビア人が絶対的多数を占める地域であったが、42年5月8日にセルビア系住民の殺害と追放が終了して、住民のいない地域になった⁽⁶⁰⁾。新たに設置された経営部門には、ヤセノヴァツ収容所群から囚人を連行して強制労働に従事させた。

ヤセノヴァツからサヴァ川を15キロメートル下ったヤブラニツァ村では、種まきの終わった周辺の農地が早くから没収されていたが、41年11月になり、ヤブラナツ村のセルビア人男性はヤセノヴァツ収容所へ、婦女子は徒歩でスターラ・グラディシュカ収容所へ連行された⁽⁶¹⁾。その後、「ヤブラニツァ村からウスタシャのテロを逃れてボスニアに逃げたセルビア人がある」という口実の下、ムラカ村の浄化が開始された。抵抗する者や老人はその場で殺害され、男性は、ヤセノヴァツ収容所、ゼムンの収容所、もしくは強制労働のためにドイツへ、婦女子はワゴンでスターラ・グラディシュカ収容所に送られた⁽⁶²⁾。ヤセノヴァツとウシュティツァ村のセルビア系住民は、41年秋頃から収容所へ送られる者が徐々に出たが、42年5月8日には包囲された村から住民の収容所への移送が完了した⁽⁶³⁾。

住民を除去して設置された収容所の経済部門には、ヤセノヴァツやスターラ・グラディシュカの収容所からセルビア人やユダヤ人が労働に動員された。農場での仕事が終了する秋には不用になった大量の労働者が墓場ゆきになったことから、ウスタシャによる殺害行為は「秋の墓場」と呼ばれた。

2-4. 子供の収容所

ヤセノヴァツ収容所群で死亡した子供の数は19,554人、出身村は1,074か所に及んだ⁽⁶⁴⁾。子供のための収容所が必要となったのは、ヤセノヴァツ周辺のセルビア人居住地域において民族浄化が開始され、女性や子供もその対象となった頃からである。まず、スターラ・グラディシュカ収容所が、41年秋頃から婦女子を主要な対象とするようになった。その後、42年6月から7月にかけて実施されたコザラの軍事的制圧⁽⁶⁵⁾は婦女子の囚人候補者を増大させ、パヴェリッチとアルトゥコヴィッチ内

(60) Miletic, *III*, 705.

(61) Ljubica Subotic (当時22歳)の証言, In: Miletic, *III*, 557.

(62) 44年1月29日セルビア難民担当省における難民の証言 Miletic, *II*, 709. ゼムンは、セルビアの首都ベオグラードから5キロメートルの所にあるが、41年クロアチア独立国家領に組込まれた。スターラ・グラディシュカについては、以下2-4-1.を参照。

(63) 42年6月9日セルビア難民担当省における難民の証言 Miletic, *I*, 302-303.

(64) Bulajic, *Jasenovac. Ustaski logori smrti. Srpski mit ?*, Beograd 1999, 374.

務大臣の7月12日の決定で、子供たちを「再教育」するための特別な収容所がゴルニャ・レカ、ヤストレバルスコ、スィサクの3か所に設置された⁽⁶⁶⁾。コザラの麓の140村から全住民が追放され、23,858人の子供を含む68,600人が収容所に収監された。子供の半分以上は故郷に二度と戻ることができず、41年4月から45年5月までに死亡し、名前が明らかになっている14歳以下のコザラの子供は、98年3月時点で13,184人に上る⁽⁶⁷⁾。そのうち、ザグレブに35か所存在した「引き受け所」を通して子供は約7千人、ザグレブ市の死体管理人が鑑定をした死体は862体に上る⁽⁶⁸⁾。しかし、ザグレブ市内のミロゴイ墓地が開設100周年記念して73年に出版した墓地史「ミロゴイ」は、死亡した子供の数を300人に矮小化した上、「ファシストによるテロの犠牲者」と呼び、セルビア人が犠牲者であることにも、加害者がウスタシャであることにも言及していない⁽⁶⁹⁾。

2-4-1. スターラ・グラディシュカ収容所 (41年4月から)

スターラ・グラディシュカ収容所は、ヤセノヴァツからサヴァ川を30キロメートル下流へ下った所にあり、かつての監獄をウスタシャが強制収容所に使用した⁽⁷⁰⁾。既に41年4月・5月、グラディシュカやスラヴォンスキ・ブロードから数十人のセルビア系およびユダヤ系の囚人が収容されたが、囚人の数が急増したのはゴスピッチ収容所群が閉鎖された41年夏になってからであった。ヤセノヴァツ収容所システムの中で、ヤセノヴァツ第3収容所に続き多くの犠牲者を出した。民族解放戦争戦士協会スターラ・グラディシュカ支部はスターラ・グラディシュカ収容所で死亡した者の数を8万としている⁽⁷¹⁾。収容所の特徴は、囚人が主に子供と女性で、ユダヤ人も多かったことである。また、

(65) 「コザラ」は、サヴァ川、ウナ川、サナ川、ヴルバス川に囲まれた丘陵山岳地域で、住民の圧倒的多数がセルビア人であった。ウィーン・アテネ間の鉄道が近くを走り、ウスタシャが遷都を考えていたバーニャ・ルーカがコザラの麓にあるという戦略的に重要な土地でありながら、パルチザンに解放された土地となっていた。ウスタシャ及びドイツにとり、同じくパルチザンの手中にあった西スラヴォニアなど他地域に解放運動が拡大する危険を排除する必要があった。ドイツに鉄鉱石を輸出したリュビヤ鉱山も存在した。軍事行動には、第714師団の指揮下に置かれた「西ボスニア」戦闘集団とクロアチアの祖国防衛隊計4万人が参加した。司令部には、後に国連事務総長となったヴァルトハイム元大統領が所属した。

(66) Dedijer, *das jugoslawische Auschwitz*, 182-183.

(67) 名前の確認できているコザラ出身の犠牲者は98年3月現在51,885人（うち女性が16,025人）、民族別内訳はセルビア人48,725人、ムスリム1,227人、クロアチア人652人、ロマ人620人、ユダヤ人288人他。51,885人のうち戦闘参加者は9,932人。Bulajic, *Jasenovac. Ustaski logori smrti*, 148. Dusko Tomic, *Putevima smrti Kozarske djece*, Prijedor 1990, 104.

(68) Tomic, 47, 107. 111頁から203頁死亡者リスト掲載。遺体はミロゴイ墓地の墓地区画142に埋葬された。墓守のヨシップ・バヴィチッチは、4メートル四方で1、2メートルから2メートルの深さの埋葬墓地に、平均16人、乳児の場合16人以上埋葬したと証言している。Ibid., 48.

(69) Ibid., 50.

(70) ハプスブルク帝国が、オスマン帝国との境界にあるスターラ・グラディシュカに築いた要塞の一部で、既にハプスブルク時代から監獄として使われるようになった。

(71) Milan Blajic, *Ustaski zlocini genocida i sudjenje Andriji i Artukovicu 1986. godine*, III, Beograd 1989, 151.

ここから労働可能な女性はドイツに送られた。収容所を囲む高い壁のすぐ背後はすぐサヴァ川が流れ、死体がサヴァ川に遺棄された他、乳幼児をサヴァ川に放り込んで殺害するという方法が適用された。⁽⁷²⁾

スターラ・グラディシュカ収容所で労働力調達担当の補佐役を務めた独軍シュミット・ザビエロフ中尉によれば、数百人の子供が青空の下、水や食べ物を求めて泣いていた。「(収容所の) 囚人は正教徒から調達され、その数は数千人に上る。男性は既にドイツへ連行されたため、その妻や子供が殆どである。それゆえ、最も小さい子供たちの面倒は、クロアチア国家に委ねられているのである。」自らスターラ・グラディシュカの囚人であったマリアナ・アムリッチは「寄る辺のない子供たちが横たわっていた。泣く力もなく、ゆっくりと静かに死んでいった。その子供たちと同じように途方に暮れた女性の囚人約20人が、子供たちの面倒をみた。ある時、病気の子供を塔の屋根裏部屋に連れていくよう命令を受けた。その部屋に、アンテ・ヴルバン司令官が毒ガスを送り込んだ。その後、命の炎が完全に消し去られたかのように、ぞっとするような静けさが支配した。」と、収容所内の様子に言及している。⁽⁷³⁾

2-4-2. ヤストレバルスコ収容所 (42年7月12日—11月)

ヤセノヴァツ強制収容所システムの各収容所に収容されていた子供たちは、42年7月中旬以降、42年7月12日に開設され11月に閉鎖されたヤストレバルスコ児童収容所 (ザグレブ南西25キロメートル) に集団で移送された。7月中旬に、スターラ・グラディシュカ収容所から770人、7月末にヤブラナツ収容所から850人、8月5日にはムラカ収容所 (ヤセノヴァツからサヴァ川下流方向へ11キロメートル) から800人子供が届けられた。この収容所は、ミーレ・ブダク教育文化大臣の義姉ブヘリヤ・バルタが指揮を取り、聖ヴィンコ・パウルスキ修道会の修道女が運営を担当した。収容所の建物には、ハンガリー貴族エルデディの穀物倉庫、フランシスコ修道会の建造物、3キロメートル離れたレカ村にあるイタリア軍の旧バラックを厩として使っていた建物が使われ、穀物倉庫に病気の子供が、藁の敷かれた厩には健康な子供約2千人が収容された。確認された子供の囚人数は3,336人、そのうちザグレブやヤストレバルスコのクロアチア人家族に引き取られたのが1,637人、カトリック社会福祉事業団のカリタスが面倒を見た子供が約500人、42年8月にバルチザンの人民解放軍第四コルドゥン旅団がヤストレバルスコを襲撃した際に連れ去った比較的大きい子供の数が数百人とされる。労働省により死亡が確認されたのは、449人、ヤストレバルスコの墓守フラニョ・イロヴァルの日記では死亡した子供は768人であった。収容所の閉鎖後も孤児として戦争終了時まで残った子供は約300人に上る。⁽⁷⁴⁾

(72) Colic, 384.

(73) Dedijer, *das jugoslawische Auschwitz*, 182.

(74) Ibid., 182-183.; Persen, 287-288.

2-4-3. スィサク収容所（42年7月29日—43年1月8日）

42年7月29日、ムラカ収容所から子供の囚人1,200人がスィサク（ヤセノヴァツからサヴァ川を上流方向に70キロメートル）の収容施設（ノヴィ・スィサクの小学校、製塩所、聖ヴィンコ修道女の修道院）に到着し、「難民の子供の引受所」という名称の下、社会福祉省管轄の収容所が誕生した。8月3日、女性や老人を中心とする「難民のための暫定収容所」がガラス工場と醸造所を利用して設置されると、子供連れの難民が到着する毎に、子供は児童収容所に収容された。43年1月8日に閉鎖されるまで、5千人から6千人の子供を収容し、そこから養子に行った子供は約4千人、そのうち42年9月から43年1月にかけてザグレブを経由してクロアチア人家庭もしくはカリタスに引き取られた子供は、2千人から2,300人いる。⁽⁷⁵⁾ 死亡は1,152人もしくは1,631人に上るとされる。

親から引き裂かれた子供の囚人は、アイデンティティを消され、番号のみの存在となった。物心つく前の乳幼児・幼児は親の記憶もないまま、幸運な場合は、クロアチア人家族に引き取られ、クロアチア人として生き返って新たな人生をもらった。その際、誕生日の判明しない子供は、クロアチア独立国家の樹立記念日である4月10日を誕生日として押しつけられた。しかし、新しい名前をつけられ、カトリックの洗礼を受けた幼児たちの多くは、その後クロアチア人として育ち、90年代のクロアチア内戦において、セルビア側の親族同胞に銃口を向けた兄弟殺しに巻き込まれることとなった。

IV. おわりに

この稿では、クロアチア独立国家によるセルビア人抹殺政策とその政策の中で中心的な役割を果たした強制収容所システムを紹介し、戦闘状況の中で「兄弟殺し」が自然発生的に起こる以前に、国家による計画性と「民族浄化」的性格を備えた殺戮が行われていた事実を取り上げた。

第2次世界大戦中のクロアチア政府が、反セルビア人政策を行わなければならない原因を、セルビア民族主義者によるテロ活動に転嫁しようとしたのに対し、ナチズム研究者プロシャートらの研究は、ウスタシャの大規模なテロ行為こそが民族間の武力的衝突の激化につながったとする41年春以降のドイツの内部報告に言及している。ドイツ側としては、ドイツ占領下のクロアチア独立国家におけるテロ行為の激化が、ドイツ国防軍一般に対する信頼失墜に直結しかねないとの危機感を覚え、クロアチアにその抑制を度々申し入れるが事態の収拾はつかず、セルビア人迫害とセルビア人難民の急増が直接的に南東欧の不安定化とドイツ軍に対する抵抗勢力の拡大を招来した。⁽⁷⁶⁾

(75) Ibid., 288-291. 2度目の大規模な児童の集団移送は、42年8月、スターラ・グラディシュカからの1,200人、3度目は42年10月の722人。10月までにスィサクで直接親から引き離されて収容された子供は約2千人であった。

しかし、戦後のチトー政権下で歴史の清算が禁じられた事態は、80年代及び90年代のユーゴスラヴィア崩壊において、セルビア人大量虐殺をめぐる論議が政治化する余地を与えた。新生クロアチア国家が行ったことは、次の4点である。

- (1) ヤセノヴァツ強制収容所がセルビア人の作った「神話」であるという公式見解を打ち立てた。
- (2) セルビア人によるウスタシャに対する報復行為のみを取り上げ、セルビア人による侵略行為、大セルビア主義的行為として宣伝した。⁽⁷⁷⁾
- (3) 90年代の新生クロアチア国家によるセルビア人の迫害が、同様な言語・ディスコースを使用し⁽⁷⁸⁾て正当化された。
- (4) 91年、クロアチア軍がヤセノヴァツ博物館で歴史的資料のかなりの部分を破壊した。

南東欧の多民族社会が抱える問題を総合的に把握するためにも、ヤセノヴァツ強制収容所システムとシステムを取り巻く状況の解明が必要であろう。

(元在ユーゴスラヴィア日本国大使館専門調査員)

(76) Hory/Broszat, 85, 97-100; Neubacher, 152; ウスタシャ司令部のクロアチア外務省宛書簡 Glavni stan poglavnika Ministarstvu vanjskih poslova, No. 1319, 27.7.1942.

(77) *Medjunarodni znanstveni skup "Jugoistocna Europa 1918-1996"*, ed. by Hrvatska matica iseljenika/Hrvatski informativni centar, Zadar 1995. ("Southeastern Europe 1918-1995". *An International Symposium*, ed. by Croatian Heritage Foundation & Croatian Information Centre, Zadar 1995.) 第2次世界大戦中の41年・42年にも、クロアチアのセルビア人虐殺が国際的に有名になると、逆にクロアチア人を犠牲者として描いた宣伝書を42年6月各国語で発行した。*Der Unabhaengige Staat Kroatien. Ein Bollwerk des Neuen Europa*, hg. vom Ministerium des Aeusseren im Unabhaengigen Staat Kroatien zusammengestellt auf Grund von Beweismaterial, Zagreb im Juni 1942.

(78) 註25参照。